



Title	『オデュッセイア』第1, 2歌におけるテーレマコス：成長の始点とその結果について
Author(s)	木和田, 安寿
Citation	神話学研究. 2024, 3, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100564
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『オデュッセイア』第1,2歌におけるテーレマコス ——成長の始点とその結果について——

木和田安寿

はじめに

『オデュッセイア』においてテーレマコスの「成長」がどのタイミングで始まつたかについては、以下のように議論されている。Millar and Carmichael(1954, 60)は「本当の転換点は、女神が彼に『μένος καὶ θάρσος 力と勇気』という贈り物を別れ際にしたところである。この時から彼は νηπιάς ὄχειν ではなくなっている」と述べ、テーレマコスの変化は第1歌からすでに生じているという立場をとる。Clarke(1963, 129-145)は第3, 4歌での見聞きによって獲得した成長がその後の彼の行動に大きく関わっているとし、Jones(1988, 496-506)はテーレマコスの成長について名誉の点から論じる。その一方で、Beck(1998, 135)は彼に用いられる epithet に注目し、第16歌までは特徴のない形容詞で描写されていたが、第17歌以降では独自色が強まり、人物像にも同様の変化が見られると主張する。Heath(2001, 140-145)も同様に epithet や formula に注目しているが、第3, 4歌で πεπνυμένοι な人々と関わるうちに自身もその性質を有し、第15歌以降で示すようになっているとする。筆者は、このテーレマコスの成長が Millar and Carmichael(1954, 60)と同じく第1歌 320-321行から始まっているという立場をとる。ただし、本論で明らかにしていくように、テーレマコスがこの場で示す成長は『オデュッセイア』全体で指向される家の主人や王のあり方には結びつかないものである。

本論文は、第1, 2歌で示されるテーレマコスの成長は『イーリアス』の多くの登場人物がそうであるような名誉をかけて争う者へと結びついているが、『オデュッセイア』でのテーレマコスの成長にこれらの諸要素は関わらないことを示すものである。このため、第1, 2歌での、『イーリアス』を踏まえた描写である「ἀλλ' εἰς οἴκουν ιοῦσα τὰ σ' αὐτῆς ἔργα κόμιζε, / ιστόν τ' ἡλακάτην τε, καὶ ἀμφιπόλοισι κέλευς / ἔργον ἐποίχεσθαι· μῦθος δ' ἄνδρεσσι μελήσει / πᾶσι, μάλιστα δ' ἐμοί· τοῦ γὰρ κράτος ἔστ' ἐνὶ οἴκῳ. さあ、あなたは家へ戻ってあなたの仕事に専念しなさい、織物と糸紡ぎに、そして侍女たちに仕事にかかる様に命じなさい。話し合いはすべての男の关心ごとだ、特に私の。というのもそれは家の内では私の力なのだから (1. 356-359)」と「ποτὶ δὲ σκῆπτρον βάλε γαίῃ 杖を大地に投げ捨てた (2. 80)」がテーレマコスに用いられている。

ることに注目する。これらの描写は『イーリアス』の複数の場面で用いられ、その後の展開を暗示したり期待させたりする働きを持っていた。それに対して、『オデュッセイア』第2歌のこれらの描写が登場する両場面は、描写自体は先行する『イーリアス』やその後の『オデュッセイア』でも用いられているものの、集会でのテーレマコスの成功に結び付いていないことを明らかにする。

1. 成長の兆し

本章では、テーレマコスの成長の起点が「τῷ δὲ ἐνὶ θυμῷ / θῆκε μένος καὶ θάρσος 彼の心に彼女(アテーネー)は力と勇気を据えた (1.320-321)」と描写されるこの場面にある一方で、この第1歌で暗示される成長が、戦争で活躍する英雄に向かっていくものであることを明らかにする。

テーレマコスが登場するのは第1歌113行からであり、テーレマコスはメンテース(女神アテーネー)に自身の家の窮状を嘆く。この場面では求婚者たちについて「ἡδὲ οὕτ’ ἀρνεῖται στυγερὸν γάμον οὕτε τελευτὴν / ποιῆσαι δύναται· τοὶ δὲ φθινύθουσιν ἔδοντες / οἴκον ἐμόν· τάχα δή με διαφραίσουσι καὶ αὐτόν 彼女(母)は忌まわしい結婚を受け入れることも決着をつけることもできない。そして彼らは私の家を食い潰している。彼らはすぐにも私のことも殺すだろう (1.249-251)」と述べる。彼は屋敷の中で、母に対する求婚者たちの行いを目の当たりにしながら止める手立てを持たず、自身の身すら守ることができない。さらにテーレマコスは父オデュッセウスとの関係について「μήτηρ μέν τέ μέ φησι τοῦ ἔμμεναι, αὐτὰρ ἐγώ γε / οὐκ οἶδ·· οὐ γάρ πώ τις ἐὸν γόνον αὐτὸς ἀνέγνω. 母は私が彼の子供であるというが、私は実のところは知らない。というのも誰も自分自身の生まれについて決して知らないからだ (1.215-216)」とも述べる。この発言に先立って、メンテース(アテーネー)はテーレマコスに誰何して「αἰνῶς μὲν κεφαλήν τε καὶ ὅμματα καλὰ ἔσικας / κείνῳ あなたは頭も美しい目もまさしく彼にそっくりだ (1.208-209)」と述べ、オデュッセウスと外見の点で似通っていることを指摘する¹。しかしテーレマコスにとっては、この相似は自身と父を繋げる

¹ 顔や身体の相似についてはヘレネーとメネラーオスが第4歌141-145, 149-150行で指摘している。なお、第3歌120-125行でネストールが指摘する相似は話し方の点であり、他の二例と異なる。

ものとして認識できていない²。このように、アテーネーとの会話中では、テーレマコスは家の主人たりうる者としての自覚も自信も抱けていない。

こうした中でテーレマコスはアテーネーに、271-305 行で、父の消息を聞き知るための旅とその後の求婚者殺害の計画を提案される。その後、アテーネーは上方へ飛び去る際に 「τῷ δὲ ἐνὶ θυμῷ / θῆκε μένος καὶ θάρσος, ὑπέμνησέν τέ εἰ πατρὸς / μᾶλλον ἔτι· ἦ τὸ πάροιθεν. 彼の心に彼女は力と勇気を据え、父への思いを以前よりもいつそうかきたてた (1.320-322)」と描写される。この対話の結果、テーレマコスはオデュッセウスと自身の父子としての繋がりを再認識し、現状の打破に向かうべく行動するようになる。続く描写でテーレマコスが屋敷の広間に向かう様子は「ισόθεος φώς³ 神に等しい男 (1.324)」と述べられるほど堂々としたものになっている。

この場面から、テーレマコスの言動はそれまでとは明確に異なる。楽人ペーミオスを咎めるペーネロペイアに対して「ἀλλ᾽ εἰς οἴκον ιοῦσα τὰ σ᾽ αὐτῆς ἔργα κόμιζε, / ιστόν τ’ ἡλακάτην τε, καὶ ἀμφιπόλοισι κέλευε / ἔργον ἐποίχεσθαι· μῆθος δὲ ἄνδρεσσι μελήσει / πᾶσι, μάλιστα δὲ ἐμοί· τοῦ γὰρ κράτος ἔστ’ ἐνὶ οἴκῳ さあ、あなたは家へ戻つてあなたの仕事に専念しなさい、織物と糸紡ぎに、そして侍女たちに仕事にかかる様に命じなさい。話し合いはすべての男の関心ごとだ、特に私の。というのもそれは家の内では私の治めることなのだから (1.356-359)」と語り、ペーネロペイアを退けてその場の取り仕切りを始める⁴。

テーレマコスの発言は μῆθος にあたる単語がそれぞれ πόλεμος, τόξον になると、いう違いがあるが、『イーリアス』第 6 歌 490-493 行⁵でのヘクトールの発言と、『オデュッセイア』第 21 歌 350-353 行⁶のテーレマコスの発言に一致している。第 1 歌

² Cf. Muller, 1966, 497; テーレマコスはあいまいでかすかな父親の印象しか持っていないため、第 1 歌では求婚者たちへ復讐することへの義務感を抱くことに関してあまりにも実感に乏しいと指摘している。

³ ισόθεος φώς は『オデュッセイア』中では他に第 20 歌 124 行で用いられるのみであり、両方の場面でテーレマコスに対して用いられている。こちらはテーレマコスが起床後、乳母エウリュクレイアに昨晩は客人が適切なもてなしを受けたかを確認する場面である。両場面共に、家の主人として振舞う描写がなされている。また、『イーリアス』では第 2 歌 565 行、第 3 歌 310 行、第 7 歌 136 行、第 9 歌 211 行、第 11 歌 428 行、472 行、第 15 歌 559 行、第 16 歌 632 行、第 23 歌 569 行、677 行で用いられる。

⁴ ペーネロペイアはこの場面では納得しているが、テーレマコスの帰国後に彼の振舞いが客人に対して適當なものではないと咎める場面(18.219)がある。

⁵ ἀλλ᾽ εἰς οἴκον ιοῦσα τὰ σ᾽ αὐτῆς ἔργα κόμιζε, / ιστόν τ’ ἡλακάτην τε, καὶ ἀμφιπόλοισι κέλευε / ἔργον ἐποίχεσθαι· πόλεμος δὲ ἄνδρεσσι μελήσει / πᾶσι, μάλιστα δὲ ἐμοί· τοῦ γὰρ κράτος ἔστ’ ἐνὶ οἴκῳ.

⁶ ἀλλ᾽ εἰς οἴκον ιοῦσα τὰ σ᾽ αὐτῆς ἔργα κόμιζε, / ιστόν τ’ ἡλακάτην τε, καὶ ἀμφιπόλοισι κέλευε / ἔργον ἐποίχεσθαι· τόξον δὲ ἄνδρεσσι μελήσει / πᾶσι, μάλιστα δὲ ἐμοί· τοῦ γὰρ κράτος ἔστ’ ἐνὶ οἴκῳ.

のこの 4 行は古代のいくつかの版では削除されており、また上記の『オデュッセイア』第 21 歌や『イーリアス』第 6 歌と比べると似つかわしくないという理由でアリストルコスによって削除するよう指摘されてもいる⁷。しかしこのテーレマコスの発言は、テーレマコスが家の主人たろうとする姿勢について、また『オデュッセイア』を通して描かれる家の主人や王としてのあり方について重要である。テーレマコスはアテーネーに「μένος καὶ θάρσος 力と勇気」を吹きこまれ、オデュッセウスの代理人として求婚者たちや母親に対して振舞い始める。その際にテーレマコスがこのような発言をすることで、ヘクトールのあり方への接近も強調される。

先に見たように、これ以前の場面では、テーレマコスは自身の力でなく頼りになる家の主人の力でもって現在の窮状の打破がなされることを期待していた。また、この後でペーネロペイアが旅に出る前のテーレマコスについて「νήπιος, οὐτε πόνων ἐν εἰδώς οὔτ' ἀγοράων まだ子供で、苦労も人前で話すこともよく知らない (4.818)⁸」と評価する場面があるように、彼は成熟した大人とはみなされていない。いまだ未熟な少年であるという認識がなされていたテーレマコスがこの場面で家の主人たりうる者として母に臨み、その後は求婚者たちにも対峙していくその場面で、トロイエーの存亡を背負っていたヘクトールと同様の発言をすることでテーレマコスのあり方の大きな変化が暗示される。それと同時に、彼がこの場で行うのは「μῆθος 議論」であるものの、『イーリアス』でのヘクトールの「πόλεμος 戦争」におけるような活躍をテーレマコスが今後示すことが期待される。さらにこの発言についてペーネロペイアが「μῆθον πεπνυμένον 分別ある話 (1. 361)」だと受け止め、驚嘆して屋敷へと戻っていることからも、テーレマコスの成長は「μῆθος 議論」と「πόλεμος 戦争」の二つの領域において名誉を獲得する者としてのあり方を期待させる。このようにペーネロペイアへの発言から、テーレマコスはそれまでの行動することのできないひ弱な少年を脱し、戦場や集会に出て争う『イーリアス』的な存在へと成長を始めたことが示される。

さらにこのあとにも求婚者たちに対して、アテーネーが提案した通り、翌日に集会の場で彼らが屋敷から出していくことを求めるつもりであることを宣言する(1. 368-380)。この発言の中で「ἐγὼ δὲ θεοὺς ἐπιβώσομαι αἰὲν ἐόντας, / αἱ κέ ποθι Ζεὺς δῷσι

⁷ Heubeck et al. 1988, ad 1. 356-359.

⁸ 第 1 歌におけるテーレマコスの成熟の萌芽をペーネロペイアも目撃しているのだが、第 4 歌での彼女の評価はこのように未熟な子供のままである。

παλίντιτα ἔργα γενέσθαι· / νήποινοί⁹ κεν ἔπειτα δόμων ἐντοσθεν ὄλοισθε そして私は永遠に生きる神々に呼びかけよう、そうしたらゼウスは報復行為が生じることを許してくれるかもしれない。そうすると、あなた方は償いを受けることなく屋敷の内で死ぬことになろうよ (1. 378-380)」と述べる。長年(ペーネロペイアの機織りの策略の継続期間から考えて、少なくともこの段階で 4 年目である)の求婚者たちの振舞いが死に値し、それは妥当なものであるという認識を求婚者たちに対してぶつけている。この発言に対して求婚者たちは「*ώς ἔφαθ', οἱ δ' ἄρα πάντες ὀδὰξ ἐν χείλεσι φύντες / Τηλέμαχον θαύμαζον, ὃ θαρσαλέως ἀγόρευεν* 彼はこのように言い、そして全員は唇を噛んでテーレマコスに驚嘆していた、彼が勇気を奮って発言したので (1. 381-382)」と反応している。これは第 18 歌 410-411 行と第 20 歌 268-269 行と同一である。前者は宴の最中に物乞い姿のオデュッセウスに暴行を働くいたことを咎め、彼らが宴に満足したのであれば家に帰るようにと促す発言への反応である。また後者は宴が始まる際に物乞い姿のオデュッセウスを客人として丁重にもてなすことを宣言し、求婚者たちにもその振舞いを求めた際の反応である。両場面ともにテーレマコスが家の主人たりうる者として振舞う場面を描いており、第 1 歌でのテーレマコスの発言も、同様の働きを果していると考えられる。このように、テーレマコスはアテーネー¹⁰に「*μένος καὶ θάρσος* 力と勇気」を据えられて以降、母や求婚者たちへの態度を変化させ、家の主人たりうる者として行動し始めている。

このように、第 1 歌でのメンテース(アテーネー)との会話を契機として、テーレマコスには家の主人たりうる者としての自覚が芽生える。これによってテーレマコスは、求婚者たちとの対立を明確化させていく。その過程で、第 1 歌の展開は、テーレマコスが「*μῆθος* 議論」と「*πόλεμος* 戦争」の二つの領域において名誉を獲得する者となっていくことを期待させるものとなっている。

⁹ Stanford(1959, ad 1. 377)によると、*ποινή* は単なる不作法から殺人にまで及ぶ罪に対して支払われるべき償いである。この場面では、求婚者たちの死に対して屋敷内の者が支払うべき償いのことである。

¹⁰ これに先立ってアテーネーが「*φράζεσθαι δὴ ἔπειτα κατὰ φρένα καὶ κατὰ θυμὸν / ὅππως κε μνηστῆρας ἐνὶ μεγάροισι τεοῖσι / κτείνης ἡὲ δόλῳ ἢ ἀμφαδόν* 求婚者たちをあなたの屋敷のうちで、計略によってか正面切ってか殺すよう心中でよく考えなさい (1. 294-296)」と助言していることからも、テーレマコスが求婚者たちに対して戦闘行為を行って今までの報復をなすことが暗示されている。

2. 『イーリアス』的英雄像からの変移

本章では、第2歌での集会の場面では第1歌で示した振舞いは成功しておらず、物語の展開を遅延させ、むしろそれまでに重ね合わされた『イーリアス』的なイメージがテーレマコスの成長と継承には寄与しないことが示されていることを明らかにする。

求婚者たちとの口論から一夜明け、第2歌で催した集会では、テーレマコスはイタケの人々に自身の家の窮状を訴える¹¹。この時テーレマコスは、イタケの人々の憐れみと求婚者たちの振舞いに対する怒り、オデュッセウスに対する忠節と責任感の四つの感情に訴えている¹²。また、テーレマコスはこの状況に陥っているにもかかわらず求婚者たちから自身の家を守ることができない理由を「οὐ γὰρ ἔπ’ ἀνήρ, / οἵος Ὁδυσσεὺς ἔσκεν, ἀρὴν ἀπὸ οἴκου ἀμύναι. / ἡμεῖς δ’ οὐ νύ τι τοῖοι ἀμυνέμεν」というのも家から災いを防ぐオデュッセウスのような男がいなかつたからだ。そして私たちは今、家を守ることができるような者たちでは決してない(2.58-60)」と語る。このように、テーレマコスは自分がいまだオデュッセウスに比肩する者であるとは考えておらず、力の不足を自覚している。この場面でテーレマコスは、求婚者たちの行動自体の抑止を目的とするのではなく、イタケの人々の心に訴えかけることで、彼らを味方につけ状況を明らかにしようとしている。これは自身の力では打開できないテーレマコスの、家の主人たりえない状況を示す。それと同時に、イタケの人々に王の不在を思い出させ、イタケの内外からやって来た求婚者たちの振舞いが容認されることでテーレマコスの家が食い荒らされていく状況を彼らに印象付ける効果を挙げている。

テーレマコスは求婚者たちの行動に対する怒りはイタケに人々にも神々にも¹³生じうることだと述べ、彼らの行動を非難し、その非難の正当性も示している。し

¹¹ 自身の家を襲った災いは父が死んだことと、母の求婚者たちが家の財産を食い潰していることの二つであり、後者がより大きなものであると述べている(2.45-54)。

¹² de Jong, 2001, ad 2.39-81.

¹³ 2. 64-67; νεμεσήθητε καὶ αὐτοί, / ἄλλονς τ’ αἰδέσθητε περικτίονας ἀνθρώπους, / οἱ περιναιετάουσι θεῶν δ’ ὑποδείσατε μῆνιν, / μή τι μεταστρέψωσιν ἀγασσάμενοι κακὰ ἔργα. 「あなたの方(イタケの人々)も憤り、近くに住む他の者たちに対して恥ずかしく思うはずだ。そしてあなた方は神々の怒りを怖れよ、彼らが悪行に怒って(あなた方に)向きを変えて罰しないように。」 West(Heubeck et al. 1988, ad 2. 64-66)によれば他者の調停を促すことになる誤った行動への怒り(νέμεσις)や、社会的状況や他者の行動への反応である恥(αἰδώς)はよく組み合わせて用いられる。これらに加えてもっぱら神の怒りを表す(cf. LSJ μῆνις)μῆνιςを用いている点から、直接言及されているわけではないものの、テーレマコスの怒りの程度も暗に示されていると考えられる。

かしながら、テーレマコスの発言の対象はイタケーの人々に徐々に変移し、自身の家が食い荒らされ、自分がやせ衰えていくのを見捨てるように(2. 70-71)述べる。また、この家の衰退をもたらしている振舞いが求婚者たちでなくイタケーの人々によるものなら弁償を得ることができたのに(2. 76)とも述べ、「νῦν δέ μοι ἀπρήκτους ὁδύνας ἐμβάλλετε θυμῷ 今やあなた方は私の心にいかんともしがたい苦痛を投げ込んでいるのだ (2. 79)」と言って演説を締めくくる。この場面でのテーレマコスの目的は、イタケーの人々の心を同情や憐れみでつかみ、協力者や援助者として味方に取り込むことにある¹⁴。家の主人として自力で求婚者たちを追い出すことはできていないため、テーレマコスの未熟さが表れている¹⁵ものの、その一方で周囲からの助力を引き出すという異なる方法で家を守ろうという姿勢も示される。

テーレマコスはこのあと、以下のような行動をとる。

ώς φάτο χωόμενος¹⁶, ποτὶ δὲ σκῆπτρον βάλε γαίη
δάκρυ' ἀναπρήσας· (2. 80-81)

(テーレマコスは)このように怒って言うと、涙をほとばしらせて杖を大地に投げ捨てた。

杖を大地に投げ捨てる行動は『イーリアス』第1歌 245-246行¹⁷でも見られ、アキッレウスのアガメムノーンに対する強い怒りを示すものである。第1歌でもヘクトールを思わせる発言がなされていたが、この場面ではアキッレウスを想起させる。しかし、アキッレウスの方はアガメムノーンを非難し、自身が前線から退いたことをアカイア勢が嘆くだらうことを宣誓した後での行動である。さらに、この後ネストールの仲裁が入るも、アガメムノーン、アキッレウスの両方が互いに対する怒りが収まらないことを述べて退席する。また、そもそも集会の場では発言者が杖を持つことが慣例であり、これを投げ捨てるることは聞き手に強い印象を与えることにな

¹⁴ de Jong, 2001, ad 2. 39-81.

¹⁵ この場面でのテーレマコスの発言について、Heath(2001, 140)は彼が自身の成熟を示そうとして無邪気に率直で無力であると捉える一方、小川(2021, 244)は彼が幼い子供ではなく独立した成人となり、求婚者たちの脅威や深刻な妨害となりうる者として自己の存在を示していると評価している。

¹⁶ Heubeck et al. 1988, ad 2. 80; ここでの χωόμενος は怒りを表すと同時に、不満や失望を含意する言葉である。

¹⁷ Ὡς φάτο Πηλεΐδης, ποτὶ δὲ σκῆπτρον βάλε γαίη / χρυσείοις ἥλοισι πεπαρμένον ペーレウスの子はこのように言うと、金の鉢を打った杖を大地に投げ捨てた

る。このように、『イーリアス』第1歌でのアキッレウスが杖を投げ捨てるによって怒りが表されると同時に宣誓が明確化され¹⁸、物語全体に働きかけて『イーリアス』の主題が強く示される¹⁹。

この一方で、テーレマコスがこの場で杖を投げ捨てた行動は、アキッレウスが与えたほどの影響力はなく、また行動がなされるタイミングも異なっている。テーレマコスが杖を投げ捨てるに至ったこの演説は、アキッレウスとは異なり、集会を開いたのは誰なのかという問い合わせに対する答えから始まる。テーレマコスは議論の最初に自身の窮状を訴え、求婚者たちの糾弾、イタケーの人々への嘆願を行い、そのうち杖を投げ捨てて発言を打ち切っていることになる。議論ではなく一方的な主張となっており、「οὐτε ποθ' ἡμετέρη ἀγορὴ γένεται οὐτε θόωκος / ἐξ οὐδὲν δῖος ἔβη κοιλῆσ' ἐνὶ νηυσὶ 神のごときオデュッセウスが空ろな船で行ってしまってから、これまで決して集会も会議も開かれなかった(2. 26-27)」と述べられていることからも、テーレマコスがこれまで議論に参加したことがない効果的な議論の方法を身につけていないことが示される。つまり、テーレマコスは次代の家の主人としての教育を現在の家の主人(オデュッセウス、ペーネロペイア)から受けていないことは明らかである²⁰。これらのことから、テーレマコスの発言がこのように強烈な感情の発露で締めくくられることで、彼の自制心の未熟さも表されている。このように、議論の場ではテーレマコスはアキッレウスとは異なり適切に行動できておらず、これは模範の不在や教育の不足に起因する未熟さが原因である。

これらの発言と杖を投げ捨てるという行動に対し、聴衆は以下のように反応する。

(前略) οἴκτος δ' ἔλε λαὸν ἄπαντα.

ἔνθ' ἄλλοι μὲν πάντες ἀκήν τοις, οὐδέ τις ἔτλη
Τηλέμαχον μύθοισιν ἀμείψασθαι χαλεποῖσιν. (2. 80-83)

そして憐れみがすべての人を捕らえた。

そこで他の者らはみな黙っていた。そしてテーレマコスにあえて
厳しい言葉で答える者は一人もいなかつた。

¹⁸ Kirk, 1985, ad l. 245-246.

¹⁹ 木和田、2020年、46-67。

²⁰ とはいって、オデュッセウスは出征から20年も不在であるため、当然のことではある。

οἴκτος は『オデュッセイア』ではこの場面と第 24 歌 438 行²¹でのみ用いられ、どちらの場面でも集会の場で自身の死を願う者に対して寄せられる。しかしながらこの二つの場面には、その後の進行について違いが見られる。第 24 歌では人々が沈黙したことを見示す次の行で屋敷から召使たちがやって来たことが語られる。彼らは求婚者たちの最期とオデュッセウスの帰国を告げ、聴衆は恐怖し屋敷に向かう者らを制するが、求婚者の親族たちは大声をあげて武器をとる。このように聴衆の憐れみよりも親族たちの行動を中心に描写し、しかも速やかに場面は展開する。つまり、この場面では聴衆たちに、オデュッセウスたちとの今後の戦闘を期待させることに主眼が置かれている。集会もこのやり取りが済むと解散し、神々がオデュッセウスの側に立つことを宣言する場面に移る。第 24 歌では、彼らの対話の描写を中心に物語は進行し、憐れみは議論を中断させる要因にはなっていない。

この一方で第 2 歌では、聴衆は憐れむと同時に沈黙している。さらに、その場の人々²²はテーレマコスに対して述べるべき言葉を探している。これらのことからも、テーレマコスに対するイタケーの人々の評価を推測しうるだろう。テーレマコスは当初の目的通りイタケーの人々の心に訴えかけることには成功しているが、自身の未熟さもイタケーの人々にさらけ出すこととなった。この沈黙の後にただ一人²³、有力な求婚者のアンティノオスがペーネロペイアを糾弾する反論を行う。テーレマコスの演説がイタケーの人々の胸を打つものの、事態の打開へは効力を持たないという点で無力であることが示される。

このため、この後の議論の進行は求婚者たちや助力を申し出る他の人物が握ることになる。この集会の中でテーレマコス側に立って意見を述べるのはハリテルセースとメントールであるが、彼らは両方ともに積極的に求婚者たちを糾弾するわけで

²¹ 「ώς φάτο δάκρυ χέων, οἴκτος δ' ἔλε πάντας Αχαιούς. (エウペイテースは)このように涙を流しながら言うと、憐れみがすべてのアカイア勢を捕らえた」この台詞は求婚者たちの親族がオデュッセウスたちへの復讐心を語っており、第 2 歌と同じく集会の中で述べられる。432-436 行で「親族を殺害した者に復讐しなければ後世にも残る恥辱であり、生きるよりも死んでしまいたい」と述べる点からも、第 2 歌や『イーリアス』との関連が指摘される。

²² この “ἄλλοι πάντες” に求婚者たちが含まれるかどうかは不明であるが、このあとに「Ἄντινοος δέ μιν οῖος ἀμειβόμενος προσέειπε: そしてアンティノオスだけが彼に対して答えていった (2. 84)」と語られていることから、彼以外の求婚者たちも含まれていると推測しうる。

²³ この “ἄλλοι πάντες” と “οῖος” の対比によって、アンティノオスの人物像が好ましくないものとして描写されている(de Jong, 2001, ad 2. 81-84)。

はない。前者はゼウスの遣わした二羽の鷲が相争う様子²⁴を見て、オデュッセウスの帰国とそれに伴う求婚者たちの殺害を予言し(2. 161-176)、後者は求婚者たちを留めることのないイタケーの人々を糾弾している(2. 229-241)。彼らに対して求婚者たちがそれぞれ反論や罵倒を行い、集会は解散となる。この時テーレマコスは議論に口を挟むこともできず、イタケーの人々を仲間につけて積極的に求婚者たちを家から追い出すこともできない。テーレマコスの開いた集会は現状の打破にはつながらず、本人にもオデュッセウスから家を引き継ぐ者としての自覚は生じないままである。

先にも述べたが、第1歌でテーレマコスが集会の開催を宣言し神々から求婚者たちへの報復を願う発言では、求婚者たちは「ῳ̄ς ἔφαθ’, οἱ δὲ ἄρα πάντες ὁδᾶξ ἐν χείλεσι φύντες / Τηλέμαχον θαύμαζον, ὃ θαρσαλέως ἀγόρευεν」彼はこのように言い、そして全員は唇を噛んでテーレマコスに驚嘆していた、彼が勇気を奮って発言したので(1. 381-382)」と怒りを示す反応をし、テーレマコスは自身の家の主人たりうる者としての立場を明確化した。この一方で、まさしくその宣言された集会において、テーレマコスがなした演説の効果は人々に「οἰκτος 懐れみ」を抱かせるのみであり、事態の打破には結びつかない。アキッレウスの怒りやその発露がその後の物語全体に影響を与えた一方で、テーレマコスの怒りは集会の展開すら自身の助けとすることができなかつた。

このあとでテーレマコスは浜辺へ行きアテーネーとの対話を再び行い、ピュロスとスバルテーへの旅を決意する。集会後の女神との語らいが後の行動に繋がる点では『イーリアス』第1歌での集会後のアキッレウスとも共通するが、テーレマコスの場合は物語全体の展開に寄与する行動というよりは、彼自身の成長を促すものとしてこの語らいは機能している。

このように、第1歌ではテーレマコスの「μένος καὶ θάρσος 力と勇気」が彼を家の主人たりうる者として行動を促し、『イーリアス』的な「μῆθος 議論」と「πόλεμος 戦争」に優れた英雄として事態の打破へと導くかのように示される。しかしその後、第2歌において集会を開くものの、求婚者たちの行動の抑止にはつながらず、イタケーの人々からも憐れみは獲得するものの積極的な家の立て直しへの助力は得られない。ここまでテーレマコス自身には『イーリアス』的な行動や発言、物語展開が

²⁴ この鷲二羽の闘争が示すところについては不明瞭なところがあるものの、本論文ではこの鷲の行動によってオデュッセウスの帰国と求婚者たちの殺害が示されたという点にのみ注目する。

重ね合わされてきたものの、第2歌での集会でテーレマコスが求婚者たちの追放に失敗したことから、これらの『イーリアス』的な要素に代わる家の主人像が第3歌以降で展開されることが期待されることとなる。

おわりに

『オデュッセイア』第1歌序盤において、テーレマコスはオデュッセウスとの親子関係の中に自身を位置づけられないでいる。しかし女神アテーネーとの語らいの中で「μένος καὶ θάρσος 力と勇気」を吹きこまれ、オデュッセウスの代理人として求婚者たちや母親に対して振舞い始める。この時にテーレマコスは『イーリアス』第6歌のヘクトールを思わせる発言をし、その後の展開として彼が「μῦθος 議論」と「πόλεμος 戦争」の二つの領域において名誉を獲得する者として、つまり『イーリアス』的な活躍を見せる者として成長していくことを期待させる。

しかしながら第2歌の集会において、テーレマコスは民衆の説得に失敗する。この場面ではテーレマコスは聴衆から「οἰκτος 懐れみ」を獲得するものの、家の窮状を打破できるような方策を自身から提案し実行することも、イタケーの人々からの積極的な支援を得ることもできないままである。この場面では『イーリアス』第1歌のアキッレウスを思わせる描写が重ねられ、彼の怒りの甚だしさを示すとともに、この場面では物語全体の展開に寄与せず、テーレマコス個人の成長を促すものに留まっている。『オデュッセイア』は『イーリアス』以後を語る物語ではあるが、このようにテーレマコスの描写を通して、異なるテーマや英雄像のもと展開する物語であることを第1,2歌で示している。

参考文献

- Allen, T. W. (Ed.), *Homeri Opera 3*, Oxonii, 2nd edn, 1922
Allen, T. W. (Ed.), *Homeri Opera 4*, Oxonii, 2nd edn, 1922
Stanford, W. B. (Ed.), *Odyssey I-XII*, Bristol Classical Press, 1948(2004)
Stanford, W. B. (Ed.), *Odyssey XIII-XXIV*, Bristol Classical Press, 1948(2004)
West, M. L. (Ed), *Odyssea*, De Gruyter, 2017
ホメロス、松平千秋訳、『オデュッセイア 上下』、岩波書店、1994年
ホメロス、中務哲郎訳、『オデュッセイア』、京都大学学術出版会、2022年

Cunliffe, R. J., *A Lexicon of the Homeric Dialect*, new edn, University of Oklahoma Press, 1963

LfgrE = Snell, B., *Lexikon des frühgriechischen Epos*, Vandenhoeck und Ruprecht, 1955

LSJ = Liddell, H. G., and others, *A Greek-English Lexicon with a Revised Supplement*, 9th edn, Clarendon Press, 1996

de Jong, I., *A Narratological Commentary on the Odyssey*, Cambridge University Press, 2001

Heubeck, A., West, S., and Hainsworth, J. B., *A Commentary on Homer's Odyssey* v.I, Clarendon Press, 1988

Kirk, G. S., *The Iliad: A Comenntary* v.I: books 1-4, Cambridge University Press, 1985

Beck, D., "Speech Introductions and the Character Development of Telemachus", *Classical Journal* 94(2), 121-141, 1998

Clarke, H., "Telemachus and the Telemacheia", *American Journal of Philology* 84(2), 129-145, 1963

Heath, J., "Telemachus ΠΕΠΝΥΜΕΝΟΣ: Growing into an Epithet", *Mnemosyne* 5(2), 129-157, 2001

Jones, P., "The Kleos of Telemachus: *Odyssey* 1. 95", *American Journal of Philology* 109(4), 496-506, 1988

Millar, C. and Carmichael, J., "The Growth of Telemachus", *Greece and Rome* 1(2), 58-64, 1954

Muller, M., *Athene als göttliche Helferin in der Odyssee*, Heidelberg : C. Winter, 1966

小川正廣、『ホメロスの逆襲 それは西洋の古典か』、名古屋大学出版会、2021

木和田安寿、「『オデュッセイア』第二歌におけるテーレマコスの怒り ~σκῆπτρον の用いられ方について~」『文芸学研究』23、46-67、2020年

(京都大学人文学連携研究者)